●◆しゃばのしがらみを、仏の願いの中でいただこう◆●

仏の願い

平成 23 年　西雲寺だより　夏号（22 号）

もくじ

２～３ページ　親鸞聖人のご生涯・帰洛
４～５ページ　宗祖親鸞聖人 750 回大遠忌参拝のご報告
６ページ　寄稿（武周町・松田桂子さん）
７ページ　掲示板の言葉、大台所が改修されました
８ページ　ご本山差し向け布教がつとまりました

親鸞聖人のご生涯

帰洛

帰洛の理由

親鸞聖人は四十二歳の頃に関東にお入りになってから、おおよそ二十年の歳月が流れました。その間精力的に伝道布教され、関東一円に念仏のみ教えが広がり、有力なお弟子たちによって、至るところに念仏の共同体が形成されていったのです。

また念願であった、法然上人の専修念仏のみ教えを体系的に真実であることを明かされる『教行信証』も一応完成し、念仏停止（ちょうじ）、流罪という承元の法難を通して、よき師法然上人より託された仏法弘通（ぐずう）という大きなお仕事を果されていかれたのです。

聖人六十二歳の頃、二十年間住みなれた関東の地を離れ、帰洛の途につかれます。その理由について、ご自身は全く語られていませんし、記録も残っていませんので想像するばかりですが、いろんなことがいわれています。

その一つは望郷の念です。人生、四、五十年といわれた当時において、六十歳を過ぎると故郷が恋しくなるというのです。京都は聖人にとって生まれ故郷であり、特に二十九歳から三十五歳まで、よき師法然上人と出遇い生活を共にされた場所でありました。命終える前に京都に戻りたいと思われたということです。

これは当然のことのように思われますが、しかし京都は聖人にとってそう簡単に帰れる場所ではなかったのです。京都において念仏に対する弾圧は流罪以降も断続的に続いており、特に聖人五十五歳の時には、比叡山の僧兵たちによって法然上人の墳墓があばかれるという嘉禄（かろく）の法難が起こり、聖人が京都に足を踏み入れる情勢ではなかったのです。

二つ目は『教行信証』を完成させたいということです。関東の稲田において一応草稿本といわれるものはでき上がったのですが、やはり関東において目にできる経、論、釈は限られたもので、更に完成させる為には京都に戻り、数多くの経、論、釈に目を通す必要があったというものです。しかしこれは簡単なことではなかったと思われます。なぜなら聖人は三十五歳の時、京都を追放された身であり、自ら「愚禿」と名告り僧籍を返上された方です。そのような僧籍をもたない者が大きな寺院に出入りして経、論、釈を見ることができたのか疑問に思われます。

三つ目は関東においてお念仏の教えが広まり、お弟子やお同行の数が増えるにつれ、聖人を人師（にんし）として祭り上げ崇めるようになってきたことに対し、深い懸念をいだかれるようなったことです。『歎異抄』に「親鸞は弟子一人ももたずそうろう」とあるように、聖人は人の師となることを避けてきましたが、自身を戒めるために関東を去ることにしたというものです。誰しも人師として崇められることは心地よいものであり、そこに名聞利養（みょうもんりよう）（人から崇められそれによって生活がうるおうこと）を求める心が起こるのです。聖人は正像末和讃に

是非しらず邪正もわかぬ
この身なり
小慈小悲もなけれども
名利（みょうり）に人師をこのむなり

とうたっておられます。聖人にもふとそのような心が起こることがあったのでしょう。自分自身を見つめる聖人の厳しさが偲ばれます。

四つ目には鎌倉幕府による念仏弾圧を避ける為、自ら身をひいたという説。聖人が六十歳を過ぎた頃、念仏者が増えるにつれ、弥陀の本願は善人よりも、煩悩に悩み、罪を犯さざるをえない悪人を救うのであるという悪人正機の教えを正しく受け取ることができず、わざと悪を犯し、酒肉を食らい狼藉（ろうぜき）をはたらく者がでてきたのです。このような念仏の教えを曲解する者の行為が、体制の維持をはかる鎌倉幕府にとって好都合な念仏弾圧の口実となり、弾圧が行われるようになったのです。しかしもし親鸞聖人が幕府による念仏弾圧から逃れる為に帰洛されたとするならば、関東の念仏者を見捨てた身勝手な行為となるのではないでしょうか。関東での縁が尽きつつあるのを感じ、関東を離れようとされたのかも知れません。

以上四つの理由を述べましたが、それぞれが関係し合って関東を離れ上洛されたものと思われます。しかし更に付け加えますと、聖人は終生、関東に骨をうめる思いは無かったと思われます。関東において二十

年、成すべきことは成し終えたという思いではなかったかと思われます。関東一円に念仏者が誕生し、各地には信頼できる有力なお弟子方も出られるようになりました。また『教行信証』も一応完成したのです。後はお弟子たちに託し、それぞれ自立して念仏者として生きることを願われたのではないでしょうか。

親鸞聖人にとって気がかりなのはやはり、三十年間近く離れていた京都の専修念仏の状況だったと思われます。法然上人のみ教えが正しく伝えられているのか、それとも度重なる念仏弾圧によって、体制側に都合のよいようにお弟子方が自分の信念をかえてしまわれたのではないか、こころを痛めておられたことと思われます。それとともにやはり『教行信証』を更に思索を重ね、関東では見ることのできなかった経、論、釈にも目を通し完成させたいという思いにかられたことと思われます。

家族との別れ

聖人は上洛するに当り、家族を伴ったのかどうか明らかでありません。聖人には妻恵信尼との間に六人の子供がいました。小黒と善鸞は聖人の越後時代早い時期に生まれた子供であり、もうすでに小黒は母親恵信尼の所領がある越後に戻っており、善鸞は若い頃から京で生活していたと思われます。

さて家族をつれて京都に戻られるとなると六人の家族が住む家が用意され、生活の面倒をみてくれる人が必要です。三十年近く留守にしていた京都にそのような人がいたのか疑問です。また聖人は帰洛の途中、駿河、三河、尾張、美濃、近江の国を転々と布教しながら移動したようで、各地に聖人上洛ゆかりの寺が数多く残っています。そうなると家族をつれての旅は大変で、聖人は二、三人のお弟子と共に京都に向われたものと思われます。稲田の草庵跡にある西念寺の近くには、聖人が帰洛の際に見送る家族を振り返ったといわれる「見返り橋」があります。聖人はここで家族に見送られて京都に向い、妻恵信尼は四人の子供と共に自分の実家の所領がある越後に向ったのでしょう。末娘の覚信尼は、その後京都に戻って結婚をし、晩年の聖人と生活を共にし臨終をみとられました。しかしその後聖人が妻恵信尼と京都で出会うことがあったのかどうか不明です。

見返り橋

錦織寺阿弥陀如来像
（京都新聞より）

錦織寺（きんしょくじ）本尊縁起

琵琶湖大橋を望むところに真宗木辺（きべ）派のご本山である錦織寺があります。そのご本尊について次のような話が伝えられています。

聖人が稲田草庵を拠点として布教活動をしていた時のことです。その頃霞ヶ浦に怪しく光るものが出現しました。漁師はもちろん魚までその光に驚きました。漁獲は日に日に減りはじめ、漁師たちは湖面を不安げに眺めていました。そんな折、聖人が通りかかりました。漁師たちの訴えに耳を傾けていた親鸞は、湖中の光をみたとたん、

「あれは尊い仏像の光であろう」

と言下に光の正体をいい当て、

「網で仏像を引き上げ、大切に奉ずれば、魚も戻ってこよう」

と教えたのでした。そこで漁師が網を入れると一尺八寸の木彫りの阿弥陀如来像が上がってきました。聖人は「これこそ私に御縁のある仏さまだ」と喜んでお守りすることになりました。

後に聖人がこの仏像を背負われて上洛の際、錦織寺に立ち寄られた。錦織寺には本尊となる仏像がなかったため聖人はこの仏像を安置し、これが錦織寺の御本尊となったといわれています。

聖人は琵琶湖越しに懐かしい比叡山が眺められ、その向こうが京都という木部（きべ）まで辿り着いたとき、京の情勢は念仏者にとってきわめて不穏で、しばしば念仏禁止令が出され京に入れる状態でないことを知られたのです。そこで聖人は錦織寺に三年間留まり、その間『教行信証』の後半にあたる「真仏土巻」と「化身土巻」を書き上げ、ようやく上洛を果すことができたといわれています。（住職）

宗祖親鸞聖人七百五拾回大遠忌

団体参拝フォトグラフ

運転手（森・高島・阿部）さん、
ガイドさんお世話になりました

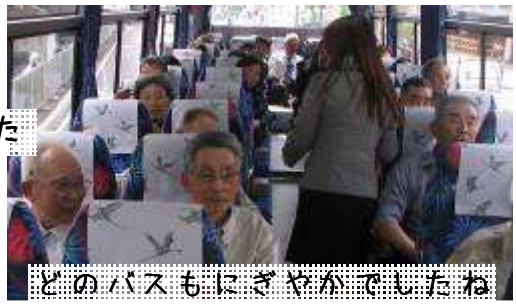
一泊の行程で本廟にお参り

本廟では正信偈六首引のおつとめ

住職も役をつとめました

おかみそりを受けられた皆さん

正信偈三首引をみんなで唱和しました



どのバスもにぎやかでしたね

雅楽を先頭におねり

浄土という方向を 宗祖もお勧め下さいます

日曜日は中型観光バスで
若手を中心に

午後からは狂言鑑賞

お楽しみの「おとき」

大師堂を正面から

千人もの読経響きて昔まるる
親鸞聖人七百五十回忌に会う

厳かに帰敬受けて念仏す
生らぬ我身も俱会一処にと

文栄

参拝された方々から16通のお便りが届きました。ありがとうございます。本当は紹介したいのですが、スペースが足りなくなりましたので、次号に掲載いたします。
（西雲寺ＨＰにはまもなく掲載予定です）
まだまだ受け付けておりますよ～
どしどし送って下さいね～お待ちしています

寄稿

武周町
松田桂子

人間には誰にでも悩み苦労があると思います。

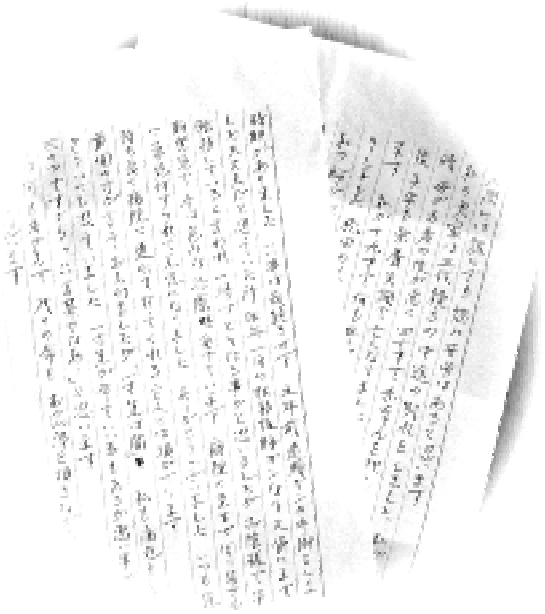
私の実家は三代続きで中途の別れをしました。私が五年生の時、母がお産の後が悪く、四十歳で赤ちゃんを残して亡くなりました。一年後、子供も栄養失調で亡くなりました。家の人は大変だったと思います。私は十九歳の時、何も世の中の事が分からず親の言いなりに嫁入りしました。松田家の人も、何とか面倒を見て下さいました。

私の姉が四十五歳、弟が四十二歳で亡くなったので、もしかして自分も死ぬのではないかと、四十代は不安な毎日でしたが、五十代になって気持ちも落ち着き、家のため子供のため一生懸命働きました。

松田の両親も、私にあまり世話をかけず亡くなりました。二人の子供も結婚し、孫も五人います。これで私の大役は終わったなぁ～これからは自由な時間がほしいと思って、地区の会合や旅行などに参加させてもらい、又、お寺にもお手伝いさせてもらって楽しい時期がありました。

いい事は長続きせず、五年前直腸ガンの手術をしました。大丈夫だと思っていたところ、昨年一月に転移性肺ガンになり、骨にまで転移していると言われ、一時はどうなる事かと思いましたが、お陰様で早期発見で今は色々な治療を受けています。病院の先生や周りの皆さんに勇気付けられて元気になりました。ありがとうございました。いつも気持ち良く病院に連れて行ってくれる主人には頭が下がります。

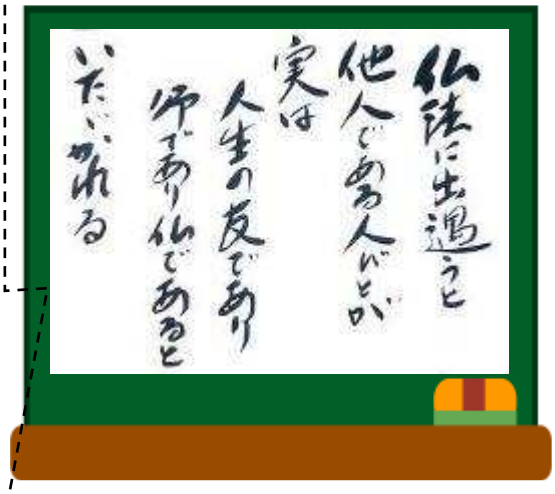
前回の方が言っておられましたが、「一寸先は闇」私も病気をしてからいつも思っていました。一寸先が分かっていい事もあるが、悪い事が多い世の中ですから「いい言葉やなぁ～」と思います。今は何も考えず、残りの命をお念仏を頂きながら楽しく暮らしたいと思います。



平成23年6月23日発行

現代は孤独だということがいわれます。少子高齢化によって、独居老人が増え孤独死する人が年に三万人といわれます。しかし孤独ということは一人ぼっちだから孤独だというのでなく、たくさんの家族に囲まれていても孤独なのです。若い者と話しが合わないとか嫁が悪いとか、他に責任をなすりつけると一層孤独化していきます。『歎異抄』の中に「弥陀の五却思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり」というおことばがあります。お念仏は「一人」の世界です。私たちは生まれてくる時も一人、死ぬ時も一人、どんな悲しみや苦しみも一人、愚痴をいっても誰も代わってくれませんし、私も代わってあげられません。ある先生は「仏さまのお念仏に出遇うと、ひとりいても静かで楽しい、大勢いると賑やかで楽しい」とおっしゃっています。一人の世界に立つことができれば、周りの人をよき師、よき友といただかれてくるのです。（住職）

山門掲示板



おかげをもちまして

水回りが改修されました

タイル張りで低かった以前の流し台　調理台や収納スペースがきゅうくつでした

大きな鍋を使うには少し浅かった以前の流し台　タイルもはがれていました

ステンレスの新しい流し台です　床を一部張り替え　対面式の調理台にしました

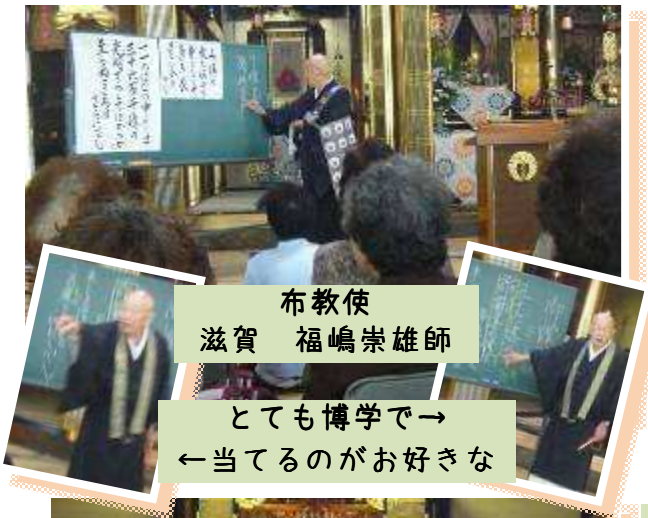
大きく深くなった新しい流し台　混合栓で簡単にお湯が使えるようになりました

意外に床下は痛んでいませんでした

古いタイルやコンクリートの山

天井を張るのは大がかりで費用もかかるので　清掃してファンを設置しました

お差し向け布教がつとまりました



布教使
滋賀　福嶋崇雄師

とても博学で→
←当てるのがお好きな

恵照御門主の句

み佛の
教え伝ふる
身となりて
尊き衣
まとふ今日かな

宗祖の御和讃

一一のはなの
なかよりは
三十六百千億の
光明てらして
ほがらかに
いたらぬところは
さらになし

安田町　末定清二氏宅にて

本堂町　池田敏雄氏宅にて

次世代へのお土産にいかがですか！

永代経の
折にでも
どうぞ

750回大遠忌　佛光寺記念式章

お寺に現在７本
ございます
（注文の場合は納品まで
約１ヶ月みて下さい）

下の２種類も
４本ずつございます
実際は佛光寺紋です

いずれも定価￥2600を
￥2000でお分けします

発　行
真宗仏光寺派　専念山　西雲寺（さいうんじ）
住職　護城一寿
筆頭総代　吉川芳弘
編集責任者　護城一哉
〒910-3523　福井市武周町５－２
電話　0776-97-2138
メール　kmgojo@mx3.fctv.ne.jp
ホームページ　http://arukou.net/

次世代の方、分家された方に！
お手元に２部届いた時には、ぜひご活用下さい。

みなさんの声　大募集！
原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。